

だい び 大事な レース

めざ なが な ねがえ
目覚ましが 鳴ると、ポビー・ハンソンは 寝返りをし、
まくらを あたま の ね うえ
まくらを 頭に 乗せて、また 寝よう としました。まだ おきる
きぶん
気分では ありません。その時です。ポビーは、今日が 特別な
ひ
日である ことを 思い出しました。待ちに 待った、その日
が やって来たのです。

お あ よう い たいそう ぎ
ポビーは さっと 起き上がると、用意しておいた 体操着に
き が
着替えました。せんめんじょ い かお たら は
洗面所に行き、顔を 洗い、歯を みがき、
け
かみの毛を とかし、ワクワクしながら 今日 の 陸上競技会 の
こと を かんが
考えていました。

「ポビー、朝食よ。」と、お母さんが 呼びました。
「そろそろ 出かける 時間よ。早くね。」

ポビーは キッチンへ 向かいました。

「よく ねむ
かあ
眠れた？」と、お母さん。

「うん！」 そう いうと、ポビーは お母さん の つく
ベーコンエッグと フライドポテトを さっと 平らげました。

「ポビー、じゆんび
準備が できたら、で まえ どう
出かける 前にお父さんが
ちょっと 話したいそうよ。外で 車を 点検してるわ。」

「わ
かあ ちょうしよく
分かった！ お母さん、朝食 ありがとう。おいしかったよ。」

ポビーは したく
支度を すませると、そと で
外に 出ました。お父さんは
そうじ
トランクを 掃除していました。「おはよう、お父さん！」



「おはよう、ボビー！今日は大切な日だね！」お父さんはしていたことをやめて、ボビーの肩に腕を回しました。「今までよくがんばった。今日に備えて、できることは全部やってきたものな。きっと緊張してるだろうね。」

「うん・・・少しね。全力出せるといいんだけど。」

「ボビー、お前を誇りに思うよ。今日に備えて、一生けん命やってきたのは分かっている。だから、今日の競技の結果がどうだろうと、父さんにとっては、お前がもう勝ったんだってことを言いたかったんだ。優勝しなければ母さんと父さんががっかりするなんて、思っちゃいけないよ。もちろん、優勝はして欲しいが、何より大切なことは、お前が一生けん命トレーニングしてきたってことだ。」

今日は、きびしい戦いになると思う。たやすくはないが、母さんも私も、お前を応援しているからな。お前を愛しているよ。一生けん命トレーニングにはげんで来て、えらいぞ。結果がどうであれ、お前を誇りに思ってるからな！」

ボビーははげましの言葉を聞いて、ほっとしました。競技会で優勝できるかわからないし、両親をがっかりさせはしないかと、気になっていたからです。

（ぼくには何てすてきな両親がいるんだろう！）と思いながら、ボビーはさっと車に乗りました。

ボビーの弟と妹も、車に乗り込みました。最後にお母さんが乗ると、車は出発しました。



りくじょうきょうぎ かい まちじゅう しょうがく ねんせい さんか
陸上競技会には、町中の小学6年生が参加します。

ボビーは、リバーサイド小学校から選ばれた
チームの1人で、200メートル短距離走に出ます。

ボビーは競技場へ向かうとちゅう、ずっと
考え事をしていました。お父さんのはげましの
言葉を心に刻んではいても、家族や友達や
先生方もふくめて、観客席から大勢の人達が
歓声を上げながら見ていると思うと、やはり
緊張してしまいます。

りくじょうきょうぎ かい ひら がっこう そばの
陸上競技会が開かれるのは、学校のそばの
リバーサイド運動公園です。ボビーはそこで幾度と
なく練習を重ねてきたので、よく知っている
場所です。お父さんも、よくいっしょに来て、
ストップウォッチで時間を測ってくれました。

「お兄ちゃん、勝てると思う？」と、弟の
ダリルが聞きました。「応えんしてるからね。
きっと、お兄ちゃんが1番速いと思うよ！」

「さあ、どうなるかな、ダリル。だけど、
全力でがんばるからね！」

かいじょう つくと、ボビーは観客席に向かう家族に
別れを告げて、自分のチームに加わりました。

マベリック・コーチは、大会が始まる前に、
少年達にはげましの言葉をかけました。「君達は
今日まで、一生けん命がんばって練習してきた。
参加する競技は別々でも、みんな、1つのいい
チームだ。」



「君達はリバーサイドの代表として選ばれ、大勢の人達が見ている。かなり緊張していることだろう。だが今は、観客のことや、勝ち負けのことは忘れて欲しい。ただ、楽しんで来なさい。そして、ベストをつくすんだ！」

ボビーは、靴ひもを結びながら短い祈りをしました。（イエス様、どうか、ぼくが勝ち負けを気にせず、ただベストをつくせるように助けて下さい。緊張しませんように。そして、お父さんやお母さんや学校みんなやコーチやチームメイト達を失望させたりしませんように。）

ボビーがスタート地点に向かうと、観客席はいっぱいで、会場は興奮に包まれていました！ 様々な競技が始まるたびに、人々は歓声を上げています。思わず圧倒されてしまいました。

アナウンサーの声がスピーカーから流れました。「次の競技は、200メートル短距離走です。」

いよいよボビーの出番です。ボビーは位置に着くと、スタートの合図を待ちました。

ボビーは、このレースに参加している他の7人を見ました。そして、他の少年達もきっと、自分と同じく緊張し、不安な気持ちで、家族や友達や学校の人達の期待に応えて勝ちたいと願っているんだろうなあと思いました。ボビーは、そんな思いをふりはらいました。（他の人達のことなど気にせず、今はとにかく勝つことに集中しなければ。）ボビーは首をすくめると、目の前のレースに思いを集中しました。



ところが、走り続けていると、心の小さな声は、どんどん大きくなっていくのです。スチュアートを助けよという声が、もう耳の中で響かんばかりになりました。ボビーは向きを変え、足首をさすっているスチュアートに走り寄りました。結局、ジェームス・アメットが優勝しました。ジェームスは大喜びで、観客も歓声を上げていました。

「何で あんなことしたんだい？ 君が勝てたのに！」と、スチュアート。

「どうしてだろう・・・ただ、そうしなきゃって感じたんだ。それがすべきことだってね。」と、ボビーが答えました。

「ありがとう、ボビー。お前って、いいやつだな。ぼくのために あんなことするなんて、一生忘れないよ。転んだ時はもう、はずかしくてさ。それに、すごく痛かったんだ！ 友達がそばにいてくれて、助かったよ。お前は最高の友達だ！」

レースの真っ最中にボビーがとった思いやりある行動は、小学6年生の時から一生続く友情を、ボビー・ハンソンとスチュアート・ダavenportの間に生み出しました。ボビーは、ただ1回のレースに勝つことだけよりも、はるかに貴重なものを得ました。一生の友を得たのです。そのレースに参加したほとんどの人達が、ボビーが、人として不可欠な資質である、おしみない心と無私無欲さを持っていることを認めたのでした。

